

平成30年度

一般入学試験B日程 学科試験問題

国 語

1. 試験時間は、60分間です。
2. 問題は、この冊子の1～24ページにあります。解答用紙は別に1枚あります。
3. 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄に記入してください。
4. 問題や解答を、声に出して読んではいけません。
5. 印刷の不鮮明、用紙の過不足については、申し出てください。
6. 問題や解答についての質問は、原則として受け付けません。
7. 終了の合図があったら、すぐ筆記具を置いて、解答用紙を机の上に伏せてください。
8. この問題用紙は、持ち帰らないでください。
9. 不正な行為があった場合は、解答をすべて無効とします。
10. 答案の文字は、ていねいに、かつ明瞭正確に書いてください。
11. その他、試験の進行については、監督者の指示に従ってください。

植草学園大学 発達教育学部

受験番号		氏名	
------	--	----	--

第一問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

ストーリーやステイールなどがおこなった追跡実験はほとんど注目を浴びず、依然としてもとの発見者たちの記事が世の中に影響をあたえ続け、行政まで動かし「ラウシャーは自分の発見について、米国議会委員会の前で発表した。そしてメディアは、最初の研究結果だけを重視し、くり返し取り上げた。その後わかった内容については、ほぼすべて無視したのである。この片寄りも驚くにはあたらぬ——名声はつねに最初の発見者のものであり、数か月後に結果をだした者や、アの成果を補足しただけの者に栄冠は渡らないのだ。だが、科学の世界でも、真価はあとからしかわからない。それを判断するのは歴史だけだ。そして報道は歴史の下書きにすぎない。新発見がなされたとき、ジャーナリストも周囲の人びとも、「この話は、少なくともほかの二つの実験で反復実証がなされるまで、報道はしないでこよう」などと、考えない。十分間で知能指数が九点上ったという衝撃的発表を目の前になると、^A抑制はむずかしい。科学的な新発見は、凶悪犯逮捕のトップニュースにも匹敵する。その後の、実験結果に裏づけがとれないというニュースは、容疑者が無実だったという話と同様、（報道されたとしても）トップは飾らない。

モーツアルト効果の物語は、広まるにつれてさらに過激になった。実際の実験はすべて大学生や成人を対象におこなわれたにもかかわらず、モーツアルトは子ども、乳幼児、さらには胎児にまで効果があるという伝説が生まれた。中国の新聞では、コラムニストがつぎのように書いている。「西側でおこなわれた研究によると、母親の胎内で「ヘコシ・ファン・トゥツテ」や「ミサ曲ハ短調」を聞いていた赤ん坊は、出産時にほかの赤ん坊より頭がよくなっているという」

社会心理学者エイドリアン・バンガーターとチップ・ヒースは、ラウシャーの最初の研究がマスコミに取り上げられた量を計測した。その結果によると、『ネイチャー』誌に報道された一九九三年には、たしかに報道量は多かったが、同じころに同誌で発表され、メディアの注目を浴びたその他の研究結果の報道量とさほど差がなかった——その他の研究とは、統合失調症、冥王星の軌道、皮膚がんに関するものである。だがその後八年のあいだに、モーツアルト効果が新聞で報道された割合は、これらの研究の十倍になった。ほかの研究に対するメディアの関心は急速に低下したが、モーツアルト効果への興味は高まったのだ。

本書の著者クリスは一九九八年、知能の概念に関する論文を執筆中に、モーツァルト効果に興味をそそられた。モーツァルト効果に対する熱狂的な反応の原因のひとつは、知能についてのメディアの取り上げ方にある。知能テストは人間の認知能力を単純化しすぎており、恣意的で、不正確で、人種差別的でもあると考える人たちは多い。B そうした人たちへのあかしとして、音楽を数分聞いただけで知能テストの結果が目覚ましく向上したという事実ほど、ふさわしいものがあるだろうか。だが、専門家たちのモーツァルト効果に対する反応は、ちがっていた。クリスは、ラウシャー、シヨー、キイによるオリジナルの研究に対して、反復実証実験の失敗例がいくつも集まっており、成功した反復実証例は、オリジナルチームがおこなったものだけであるのに気づいた。科学の世界では、一か所ないし二、三のかぎられた研究室だけがある一つの結果を生み出し、ほかの研究室では失敗した場合(有名な低温核融合がその例である)、科学者と懐疑派の人びとは、結果そのものを疑いはじめる。モーツァルト効果はほんものなのか、それとも神話にすぎないのか。

クリスはメタ分析をおこなうことにした。メタ分析とは、問題の研究についておこなわれたすべての実験から入手可能な全データを集め、信頼性の高い答えを出す統計的方法である。メタ分析の妥当性を知るには、ビンに入っているジェリービーンズの数をあてるゲームになぞらえると、わかりやすい。大勢の人がある数を一緒にあてるとき、最良の方法はめいめいが自分の答えを紙に書き出し、それを集めてすべての数を足し、人数で割って、イ値をだすことである。一人一人の回答は正解ではなくても、値が高すぎたり低すぎたりすることはない。結果として、めいめいの回答を足して平均値を出せば、高すぎる数値は低すぎる数値で調整され、正解に近い数値がえられる。

同じ原則が、科学の研究にも応用できる。個々の実験では、不用意な偏見やミスの影響でゆがみがでて、最終的な結果(この場合は、モーツァルトを聞いたあと知能指数がどのくらい上ったか)が、不正確な数値になりかねない。だが、複数の実験結果を平均すると、過大評価や過小評価の誤りが平均化され、事実に近い数値がえられる。すべての実験結果にもとづくメタ分析は、記憶に残りやすいただ一つの発見(ラウシャーとシヨーの最初の報告記事)に、不当な影響を受けたりしないのだ。

オリジナルと同じような実験が載っている科学雑誌を集めたクリスは、『心理科学』誌に掲載されたスタイルの記事を例外に、追跡実験の多くが専門家はまず読まないたぐいの、名もない雑誌に掲載されているのに気づいた。彼は記事の書き

手たちに手紙を送り、実験結果の査定に必要な補足データや情報の提供を求めた。最終的に、オリジナル実験をふくめ、モーツァルト効果を試した合計十六種類の実験結果が集まった——いずれも専門家たちが目を通す科学雑誌に掲載されたものである。すべての実験が同じモーツァルトのソナタを使い、沈黙かリラクゼーション、あるいはその両方の条件と比較していた。クリスは実験一つ一つについて、モーツァルトを聞いた被験者と、聞かなかった被験者の成績の差を計算した。モーツァルトは、沈黙とくらべると知能指数が平均一・四上回っていた。ラウシャーとショーのチームが報告した点数の、わずか六分の一である。ソナタをリラクゼーションとくらべると、モーツァルトのほうが三点上だった。オリジナルの実験結果の約三分の一だが、モーツァルトと沈黙にくらべると、その差が二倍大きい。このわずかな効果には、十分理由が考えられる。リラクゼーションは不安や興奮を鎮めるが、リラクセスした状態は知能テストの問題を解くには理想的と言えない。もちろん、**ウ**が強すぎてもよくない——穏やかな中間状態が最適である。黙って座っている状態も効果は弱いがリラクゼーションに近い——外部からの刺激がないと気持ち散漫になり、難問を解く準備には向かないのだ。

クリスは、そもそも「モーツァルト効果」なるものは、音楽を聞くプラス効果と無関係であると結論した。モーツァルトが頭をよくしたのではなく、黙って座っている、あるいはリラクセスすることが、頭を悪くしたのだ！つまり、モーツァルトの音楽は、私たちが日常生活で体験するさまざまな脳への刺激と同じようなものだったが、沈黙とリラクゼーションのほうが認知能力を低下させたというわけだ。いずれにしてもモーツァルト効果なるものは、まったくと言っていいほど存在しない。

ほかに数件、クリスのメタ分析から除外された実験があった。除外されたのは、リラクゼーションと沈黙という対照条件がふくまれていなかったためだ。だがそれらの実験には、べつの可能性が見てとれた。実験の一つは、イギリスの研究者スーザン・ハラムがBBCのために用意したものである。彼女はイギリス各地の二百にのぼる学校で八千人の子どもを対象に、大規模な実験をおこなった。子どもたちはモーツァルトの弦楽五重奏曲か、科学実験についての討論か、三曲のポピュラー（ブラーの〈カントリー・ハウス〉、マーク・モリソンの〈リターン・オブ・ザ・マック〉、PJ&ダンカンの〈ステツピングストーン〉）を聞いたあと、ラウシャーがオリジナル実験で使ったと同じ認知力テストをおこなった。もつとも成績がよかったのはポピュラー音楽を聞いた子どもで、モーツァルトを聞いた子どもと討論を聞いた子どもの成績は差がなかつ

た。この実験結果を取り上げた記事には、「皮肉っぽく「ブラー効果」と見出しがついていた。

もう一つ、トロント大学のクリスティン・ナンテスとグレン・シエレンバーグによる実験では、被験者にモーツアルトのソナタか、ステイヴン・キングの短編小説『死のスワンダイヴ』の朗読テープを聞かせた。すると被験者たちは、自分が好きなものを聞いたときに、成績がよかった。この結果については、「ブラー効果」と同様、被験者の気分は好きなものを聞いたときに向上し、気分がよくなると知能テストの成績もよくなると考えるのが妥当だろう。つまり、知能の向上とは関係のない効果である。

クリスは、自分のメタ分析の結果を『ネイチャー』に送った。ラウシャー、シヨー、キイによる最初の実験結果を取り上げた科学誌である。クリスは「エ」を断られるだろうと思っていた。自分の出した結論―わずかなプラス効果は見られるが、それはモーツアルトの音楽特有のものではなく、気分が活性化し前向きになった結果だ―が、もとの論文を掲載した雑誌そのものに、疑問を投げかけると解釈されかねなかったからだ。だが意外にも、そしてうれしいことに、同誌は掲載を引き受けた。しかも、ケネス・ステイールとその仲間が新たにおこなった実験で、またしても反復実証に失敗したという報告と並べて掲載されたのである。ラウシャーにも反論のためのページがあたえられ、『ネイチャー』はこのやりとりの抜粋を報道向け広報誌に載せた。学問の世界でも喧嘩と聞けば大喜びのメディアは、これに飛びついた。クリスはCNN、CBS、NBCのニュース番組でインタビューを受けた。ラウシャーとステイールはNBCの『トゥデイ』シヨーで激論を交わし、人気キャスターのマット・ラウアーが審判役を務めた。クリスの記事は、連続ドラマ『ペン&テラー／ブルシット!』の、「赤ちゃんブルシット」とかわいらしい題名がついた一話にも少しだけ登場した。

モーツアルト効果の報道量について分析をおこなったエイドリアン・バンガーターとチップ・ヒースは、一九九九年に『ネイチャー』誌の記事および論争と時をおなじくして、モーツアルト効果に関する報道量が急激に増えたあと、その後ふたたび低下したと報告している。クリスのメタ分析、ステイールとシエレンバーグの研究によって、ようやくモーツアルト効果に実体のないことが理解されたのだろうか。答えはイエスでノーだ。バンガーターとヒースによると、成人がモーツアルトを聞くプラス効果についての報道は少なくなったものの、モーツアルトは乳幼児の知能を高めるといふ誤った記事が、以前より一般的になったのだ！ たしかに、この風潮はラウシャーの最初の報告がたわずか一年後からはじまった。念の

ためもう一度くり返しておくが、乳幼児に対する効果を調べた研究結果は、いまだかつて発表されたことがない！ クリスのメタ分析の結果が公表された十年後の二〇〇九年に、私たちは一千五百人の成人を対象に全国調査をおこなった。^E結果を見ると、四割の人が「モーツアルトを聞くと頭がよくなる」と考えていた。否定派のほうが数は多い。だが、科学的事実はこの説をまったく支持していない。本来なら大多数の人が「オ」^Eしていいはずだ——「一般的に女性のほうが、男性より背が高い」という言い方が、受け入れられないように。

(クリストファー・チャプリス&ダニエル・シモンズ (木村博江訳) 『錯覚の科学』より)

* 出題の都合上、原文の一部を改変してあります。

問 1 空欄 を埋める言葉として、最もふさわしい漢字二字をそれぞれ文中から抜き出しなさい。

問 2 傍線部 A 「抑制」する対象は何ですか。最も適するものを次の 1～4 のうちから一つ選びなさい。

- 1 実験
- 2 訂正
- 3 反復
- 4 報道

問 3 傍線部 B 「そうした人」として、最も適するものを次の 1～4 のうちから一つ選びなさい。

- 1 元の発見者たち
- 2 知能テストに懐疑的な人
- 3 メディアに関わる人
- 4 音楽を好む科学者

問 4 傍線部 C 「モーツァルト効果」として、最も適するものを次の 1 ～ 4 のうちから一つ選びなさい。

- 1 乳幼児の知能向上に寄与する。
- 2 音楽を聞くことは知能向上に寄与する。
- 3 実体のない迷信である。
- 4 リラックスにより、認知能力を低下させる。

問 5 傍線部 D 「除外された」理由として、最も適するものを次の 1 ～ 4 のうちから一つ選びなさい。

- 1 然るべき対照実験が含まれていないため。
- 2 思うような結果に導けないため。
- 3 メディアの好む結果にならないため。
- 4 あまりにも多くの被験者を含む実験のため。

問 6 傍線部 E 「結果」について、最も適するものを次の 1 ～ 4 のうちから一つ選びなさい。

- 1 「モーツァルト効果」、「ブラー効果」ともに知能向上に寄与する事がわかった。
- 2 科学的根拠により、モーツァルトを信奉する人が多数いる。
- 3 メディアの報道にもかかわらず、モーツァルト効果が信じられている。
- 4 科学的真実にもかかわらず、メディアにより誤情報が流布している。

第二問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

高校一年の秋に、ふらりとひとり旅に出た。

ぶらりと、ではなく、ふらりと、である。それくらい私は生気を欠いていた。列車も宿もすいていたから、連休だったのではあるまい。たぶん私は学校を休んで旅に出たのだと思う。子供が三日間ゆくえ知れずになったところで誰も気に留めぬくらい、私の家庭環境は劣悪だった。

ごく簡単にいうと、私には複数の父と複数の母がいたのだが、その誰もが親としての責任を果たしていなかった。私はみずからの意思でほとんど勝手に、かつ自力で私立の進学校に通っていた。自分が人の親になって、親の気持ちが変わるどころかいよいよ憎んだほどであるから、やはり傷ましい青春であったというほかはない。

学校ではブラスバンド部のキャプテンに祭り上げられていた。何ごとにも要領というものを知らぬ私は、なまじ譜面が読めて耳もよいばかりに、一年生で練習のタクトを振る羽目になった。

その年の夏休みに、私の個人的な事情を知る唯一の先輩が、信州の湖で溺れ死んだ。私にとってはかけがえのない、音楽と文学の師であった。以来私には、この世でイ特む人がいなくなった。

おそらく私は、彼の死んだ湖に行こうとしたのだろう。しかし家を出たとたん気が変わって、新宿駅から中央本線に乗ろうとはせず、上野に出て信越線の客となった。

軽井沢で降り、駅頭に止まっていたバスに乗った。そのあたりの記憶は曖昧だが、親しんでいた文学の故地に降り立ったのはよいものの、受け止めてくれるものの何もなく、遁れるようにバスに乗った、というところであろうか。そのころの私は、どこにも自分の居場所がないような疎外感に苛まれていた。

バスは夕映えの浅間山の裾を巡って、小諸に着いた。食堂で夕食をとり、町なかの安宿に泊まった。宿の人が入れかわり立ちかわり、茶や果物を持って様子を窺いにくるのを煩わしく感じたが、今にして思えばまあわからぬでもない。

夜の更けるまで読書をし、もう読んでくれる人のない小説の続きを書いた。

あくる日は懐古園をめぐり、小海線に乗った。その列車の終点は中央本線の小淵沢で、もしかしたら私は逡巡の果てに、

先輩の死んだ北信州の湖へと向かうつもりになったのかもしれない。

しかし、途中の松原湖で降りてしまった。私のうちに残っていた生命力が引きずり降ろしたようでもあり、あるいは列車を乗り継いで遙かな場所まで行くだけの力が、すでに尽きていたとも思える。

錦繡きんしゅうの湖畔に人影は疎らだった。灯あかりともしごろまでボートに乗り、水辺の宿に泊まった。やはり夜更けまで読書をし、小説を書いた。

どう思い返そうとしても、その旅のさなかの自分の心の動きがわからない。いったい何を考えていたのか、確たる目的があったのかどうか、まるでわからない。

旅行鞆の中には、手当たり次第に掻きこんできたように、たくさんの書物が入っていた。私はそれらを、片っ端から読むでもなく読み散らした。

書くことにも読むことにも屈した夜更けであったと思う。鞆の底から一綴りの指揮譜が出てきた。曲は「海兵隊マーチ」であった。

亡くなった先輩は、一通の手紙も一枚の原稿も私に遺してはくれなかった。形見の品といえば、彼が後輩たちのために編曲した、そのスコアだけであった。

「海兵隊マーチ」は名曲である。しかしこの曲は、学生ブラスバンドの練習曲として簡明に編曲されたスコアが、一般には流布していた。先輩は米軍の演奏するオリジナルの「海兵隊」のレコードをくり返し聴いて、書き取った本物の譜面を私に託してくれたのだった。

先輩の苦心の手になる指揮譜から、各パートの楽譜を分筆する仕事は私には残っていた。形見の品というより、キャプテンのなすべき仕事として、私は宿題を持ち歩いていたのである。その夜を徹して、私はパート別の譜面を書き上げた。

最後に私の楽器であるトロンボーントロンボーンの楽譜を書いた。書きながら涙が出た。市販のスコアではまったく目立たぬそのパートが、トランペットにもまさる勇壮な旋律を奏で続けていた。

オリジナルの譜面はこれにちがいない。だが私には、先輩が私のためにそのアレンジメントをしてくれたように思えてならなかった。

あくる朝、眠れぬまま宿を出て、コスモスの咲き乱れる高原の道を駆まで歩いた。ずっと「海兵隊」の華やかなユニゾンを歌い続けていた。

おまえは文学の才能などからきしだが、音楽なら少しはいけるよ、と先輩は言った。その一言が悔やしくてならず、きょうまで歩き続けてきたようなものである。

二十歳で逝ったただひとりの師は、^B生涯鳴りやむことのない行進曲のスコアを、十六歳の私に遺してくれたのだった。

高校二年生のとき、出版社に初めて原稿を持ちこんだ。九十枚の小説だった。

むろん箸にも棒にもかからぬ代物であったけれど、返却された原稿にはいていねいに赤が入れられていた。そのとき編集者の方が開口一番おっしゃった言葉は、

「川端康成のエピゴーネンだな」
である。

私は今でも編集者のみなさんに、自分の原稿の批評を執拗に要求する癖がある。つまりその言葉は、私の作家生活における記念碑的な、編集者の第一声であった。

さて、読者は首をかしげるにちがいない。私の小説は模倣^{モトメ}どころか、川端康成とは似ても似つかぬはずである。

ところが、現在も大切に保管しているその十六歳の原稿を読むと、なるほど文章も結構も筋立ても川端さんの影響はなほだしく、苦笑を禁じ得ない。まるでトレーシング・ペーパーで書きなぞったような小説で、たぶん下敷は『みずうみ』であろうと思われる。

川端康成の小説は久しく読んでいないが、たとえば今、「みずうみ」という表題を書けばたちどころに、

「桃井銀平は夏の終り——というよりも、ここでは秋口の軽井沢に姿をあらわした」

という冒頭部分が頭にうかぶのだから、やはり相当に私淑していたのであろう。ちなみに、こう書いてしまってから原文を改めてみると、「——」も「」もまちがっていなかった。三つ子の魂百まで、である。

正確な記憶は書写のたまものである。気に入った文章にめぐりあうと原稿用紙に書き写すという習癖があつて、怖いこと

には今もしばしばこれを行う。ただし、学ぶつもりなどさらさらなく、てめえが書いた文章と信じてひとり悦に入るのである。

『みずうみ』は必ずしも川端康成の代表作とされているわけではないが、作者の小説的特徴が如実に露出した作品である。つまり川端ファンにとつてはウ垂涎のひとしなで、好きな作品を問われてこれを挙げる人はまちがいにマニアである。かつて三島由紀夫は、中央公論社版「日本の文学」の解説において、すこぶるトリッキーな川端論を書いた。「色情」や「時間」といった抽象的事象の小説化が、川端文学の特徴であるという解析である。これはいかにも三島的な、つまり反論を許してもらえないのなら、「お説ごもつともだが、そこまで言っちゃったら身もフタもないでしょうに」と言いたくなるほど明晰な理論である。この三島の川端論の最も正確に適用される作品が、『みずうみ』であると言ってよい。

それはさておき、十六歳の私が「川端康成のエピゴーネン」と凶星をさされて、ひどくショックを受けたことは想像に難くない。なにしろいまだに、そのときの編集者の顔も声も、はっきりと憶えているのである。おそらく将来、「あなたは癌です」と医師に宣告されたら、たちどころにその日のことを想起するであろう。

芸術作品の条件がオリジナリティにあるということぐらひは、十六歳の私も知っていた。声帯模写の名人がどれほど上手に鶏の鳴き声を真似たところで、彼は鶏ではない人間なのである。芸人になるつもりはなく、鶏になりたかった私は「模倣」の一言で世界が滅んだほどのショックを受けた。

その日をしおに私は、大好きな川端康成から離れた。やはり将来、医者から癌の宣告を受ければ、その日をしおに煙草はやめると思う。

しかし、川端康成に対する私の執着が誤りであったとは思わない。小説に限らず、創造はすぐれたものを模倣するところから始まり、D模倣に徹したいくつもの穴の底に、ようやく鶴嘴の先が個性の宝石を噛むと信ずるからである。

編集者の一言は重かった。鋭利な鶴嘴も持たず、豊穡の大地も知らぬ私は、それ以来やみくもにたくさんの模倣の穴を掘り続けた。

祇園花見小路の古い店に、川端康成の大きな肖像が掲げている。白髪豊かに澄んだ目を睥いた、あの有名な写真である。私は京都に上るたびその店を訪れて、敬愛してやまぬ川端さんとお茶漬けを食べる。

まさしく文士の風貌である。年齢はすでにさほど違わぬはずだが、ガラス窓に映るわが顔と較ぶれば聖俗の懸隔はなほだしく、よもや同業の人とは思えぬ。その証拠に、川端さんは永遠に店の看板だが、私はいまだ認知すらされていない。編集者から貴重なご指摘をいただいた結果、顔まで似ても似つかぬオリジナルになったのだと、この際は思うことにする。

(浅田次郎『ま、いつか。』より)

*出題の都合上、原文の一部を改変してあります。

問1 傍線部ア～ウの本文における意味として最も適するものを、それぞれ後の1～4の中から一つ選びなさい。

ア 祭り上げる

- 1 本人の意思に反して尊び高い立場を与える。
- 2 神を祀るようにあがめて一定の地位を奉る。
- 3 本人の意思にかかわらず高い立場につける。
- 4 神を祀るように敬うため身边から遠ざける。

イ 侍む人

- 1 主人として自分の身を託する人
- 2 信頼し精神的な拠り所とする人
- 3 才能を信じて尊大に振る舞う人
- 4 先生として指導をしてもらう人

ウ 垂涎のひとしな

- 1 稀少だとされる価値ある宝物
- 2 ぜひとも食べたいと思う料理
- 3 高尚な精神性の貫かれた小説
- 4 非常に強くほしいと思う一品

問2 傍線部A「私は逡巡の果てに、先輩の死んだ北信州の湖へと向かうつもりになった」とありますが、このとき「私」はどうしようと思っていたと考えられますか。最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 たくさんの書物を持って旅に出たが読書に集中できずに、文学の師である先輩の傍らで読もうと思っていた。
- 2 ふらりと旅に出てあちこち観光して最終的には北信州の湖に行き、先輩に別れの挨拶をしようと思っていた。
- 3 放心状態のまま何かに導かれるように旅に出て先輩の死んだ湖に行き、自分も死のうかと漠然と思っていた。
- 4 何となく北信州の湖を見たいと思って出てきたが道中が長く疲れたので、近い松原湖にしようと思っていた。

問3 傍線部B「生涯鳴りやむことのない行進曲」という表現が比喻するものは何だと考えられますか。最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 信じる道を進む決意をしている自分を、はげまし続ける先輩の思い。
- 2 文学の道に進みたい自分に、音楽の道を諦めるなど言う先輩の戒め。
- 3 何をしても才能の乏しい自分を、面倒がらずに応援する先輩の歌声。
- 4 道に迷う自分に、勇壮な「海兵隊マーチ」を聴かせる先輩の思いやり。

問4 傍線部C「鶏になりたかった」とありますが、鶏、になり、たい、とはどのようなことだと考えられますか。その説明として最も適するものを、次の1〜4の中から一つ選びなさい。

- 1 ものまねの芸人は素晴らしいが、自分はものまねを超えた鶏そのものになりたいということ。
- 2 技量に優れた名人であるといわれるより、むしろ真似される側の人間でありたいということ。
- 3 どれほど名人と讃えられても芸人は身分が低いので、自分の望むところではないということ。
- 4 先人のものまねではなく、真に個性を生かした作品を創造できるようになりたいということ。

問5 傍線部D「模倣に徹したいくつもの穴の底に、ようやく鶴嘴の先が個性の宝石を噛む」とありますが、これはどのような意味だと考えられますか。その説明として最も適するものを、次の1〜4の中から一つ選びなさい。

- 1 たくさんの先輩作家の作品を模倣して分析することでようやくその良さがわかって、それぞれの作家の個性を理解できるという意味。
- 2 先達の多くの作品をくり返し模倣し続けることでようやく独自の能力が育まれて、自分らしい作品を創る糸口がみつかるという意味。
- 3 多くの先輩達が模倣した作家の作品を徹底的に研究することでようやく正確な理解が可能になり、自分でも作品を作れるという意味。
- 4 先人達はたくさんの古典を学び模倣し続けてようやくそれぞれの魅力溢れる作品を作り出したので、その方法を学ぶべきという意味。

問6 次の文は、本文中のどの位置に入るべきですか。文脈をよく考えて、次の文を入れた後の形式段落の冒頭の五字を抜き出しなさい。

真のオリジナリティとは実にそうしたもので、才能という鋭利な鶴嘴を握っているだけでは得られず、また豊穡の大地から指先でひよいと拾い上げるものでもあるまい。

第三問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜7）に答えなさい。

私は二歳の時、母の手もとを離れて、父方の叔父の養女になった。その間の経緯については、長い間私の母に対する思いの中に、複雑な影を投げかけていたが、今となってみれば随縁とでもいうのか、こうなるべき運命であり、更にいえば、こうした経路を辿って、私は現在の仕事にめぐり合い、母という存在が、漸く私の中で確立したような気がしている。

母子というものが、日常何くれとなく接触し、睦み合うことの空白を、後年一挙にとり戻すことがあり得るとすれば、私が母に育てられた生後二年間に何か決定的なものが植え付けられたということであろうか。

二歳といえはまだ全く物心つかぬ頃であるが、もらわれていって、一年程経て、再び母に出会った時、私は母の顔をまじまじと見つめて、いつまでも目を離さず、「あのおばちゃんねんねする」といったという。しかし私には何の記憶もなかった。私の養父母は、^Aそれらを補って余りある程に私を大切に育ててくれた。

十六歳の時、自分の赤ん坊の写真を見て、裏に、「小野ふくみ」と記してあるのに不審を抱き、^ア漠然とではあるが、伯父一家が小野姓であることを思い浮かべた。その後、折ふしそのことが心にかかるようになり、伯父の家の四人の子供の中、三子と四子の間がはなれていて、私とその間にびったりはまることや、従兄妹達と顔が似ていること、幼心に故しらずこの一家に特別のなつかしみを抱いていたことなど思い合わせ、当時、養父の任地である中国青島^{チンタオ}に私は住んでいたが、大阪の友達を訪ねることも兼ねて、近江に住む伯父の家を訪ねたのである。

女学校二年の夏、はじめての一人旅だった。医家である伯父の家は人の出入りが多く、伯母とはめったに顔を合わせることもなく、奥の方で忙しく立働いている様子だったが、時折、私の前に数冊の画集をおいてゆくのだった。水色の表紙のセザンヌと、樺色の表紙のゴッホの画集だった。それまで西洋の絵画など見たこともない家庭だったので、特にその絵から印象を受けたわけではなかったが、濃紺の麻の着物をきて、丸顔色白の、ひつつめ髪を結った伯母が、画集をおいては、^Bそそくさと奥にひっこむ後姿だけは今もはっきり憶えている。この地方独特の紅殻塗りのがっしりした構えの、玄関を入った土間に、涼しい藍の暖簾がかけられ、^イ調度から食器に至るまで格のある古いもので統一されていて、全く異なった外国風の暮しをしてきた私には何かわからぬままに、物珍しいというだけでなく、私の魂を深く包みこむようないい知れぬ温かさが

感じられ、或いはこれが肉親の情というものかと自覚するに足らず、事が重大すぎて、幼い私には口にする事が出来ず、誰に打ち明ける術さえわからずに、ただこの夏の印象は、つよく心に焼きついたのである。

それから二年程経て、私は父の任地より離れて、一人東京の学校に通うことになった。片時も離れることのない出生の不安が、次第に胸中深く根付いてゆき、時折、大きく揺れ動いている時、偶々上京中の従姉に私は勇をふるって、「私の姉ではないか」とたずねたことがあった。もとより従姉は烈しく否定して、早々に近江に帰ってしまったが、その時、姉はもうこれ以上かくしておくことはいけないと母に語った由である。

その翌年正月、従兄の病篤く、私は厳冬の近江に呼ばれていった。母は思春期にある私が、こうした悩みをかかえて、一人暮していることを心配して、病の兄にも会わせたく、打ち明ける決心をして呼びよせたのである。当時、十九歳だったすぐ上の兄は、余命幾何もなく、私達はその枕頭に相寄り、はじめて両親、兄弟妹であることを打ち明けられた。私達は炬燵の中で一晩中語り明かした。

過ぐる夏、私が一人でこの家を訪れた時、母は私の傍によるのがおそろしくて、台所でただオロオロするばかりで、何も用事が手につかなかったといい、私の脱ぎ捨てた寝具を洗うのが惜しくて、私の帰ったあと、その布団で寝たといった。「顔を洗った水を流すのも惜しい」ともいった。「どんなことがあるうとも、これだけは打ち明けてはならぬ」と、決心し、私を手ばなしてからは、「死んだものと思つて、今日までお腹の紐を堅う堅う結んでいた。そやけど、一人で悩んでいる様子をきいて矢も楯もたまらず、とうとうお腹の紐がゆるんでしまった。かんにんしてや」と母は泣いた。両親と四人の兄弟を一挙に目前にした私は、涙も出ず、世界が一変してしまったようだった。学校が始まったのに、東京に帰る気になれず、一ヶ月程を病床の兄の枕下ですごした。その折、うす暗い納屋の奥に一台の織機のあるのに目をとめ、私は母にいろいろたずねたのである。母は兄の枕下に小さな機を組み、藍の糸をかけてくれた。後になって、母がふしぎがるのであったが、足音一つにもうるさかった重病の兄が、枕下で機を織ることをよく許したというのである。この世では縁のうすかった妹を、一目でも多く、自分の心の中に入れておきたかったのやろと母は語った。

まことにふしぎの縁というべきか、私は母を知ったと同時に、機に出会い、兄をその年に失ったのである。

一旦、^D堰を切つた水は止めようのないものである。昨日の私と今日の私は違っていた。東京にあった私の心は、常にもとに飛んでいた。しかし決して表立ってはならなかったから、その後母に会う機会はめつたになかった。

ただ私の中で急激に組変えられ、芽吹いていった真新しい世界は、母がその道すじを開いてくれた芸術の世界だった。十八の年まで全く知らなかった世界が、出生の事実と共に私の中になだれ込んできたのだった。それは、暗闇に光の射すような鋭さで、母の^ウ渾身の思いと共に私を貫いてゆくようであった。

その頃、母は一冊の小さな詩集を私に送ってくれた。山村暮鳥の『雲』という詩集で、小川芋^う銭の挿絵だった。同じく暮鳥の『鉄の靴』という童話集もあった。ふしぎな美しい物語だった。私は毛筆で一字一字写経するように写したりした。私にとって、それらは宝物であった。

その後、私が再び母のもとにあらわれて、織物の仕事をするようになるまでの十数年間に、戦は終わり、母は二人の息子を失って、体がまわり小さくなったようであった。

私はその間に、結婚、育児、そして二人の子をかかえて、独立しなければならなくなっていた。文字通り、三界に家なく、身の置き処のなくなった私は、^エ無謀なことは明らかであったが、かつて近江の家で^E手にふれたというばかりの織物を、生きる支えにしていきたいと決心するまでには、養父母に対して許しがたい不義理をかさね、東海道を行きつもどりつ、思案に暮れていた。

その頃、養父母は東京に移り住み、私の幼い娘をあずかってくれていた。突然、近江で織物をやりたいといひ出した私を、母は^F許すわけにはいかなかった。折角修業しかかった私に東京行の切符をわたし、二度と近江にはもどるなと突き放したこともあった。私も自分の強引さと周囲への迷惑を考え、一時は断念して、帰京したこともあったが、遂に一条の糸にたぐりよせられるように、再び母のもとに帰り、織物をはじめることになった。

この思いがけない成行は、明治生れの義理がたい母にとって、身の置き処のない辛い立場ではあったが、一方、六十を過ぎた今、二歳の時、死んだと思つてあきらめた娘が、自分の若い時、止むを得ず断念した織物への執念をひつ下げて帰つてこようとは、夢にさえ考えなかったことである。

これからという二十代の若い息子を二人ながら失って、人生のすべてに消極的になり、寂しい老境を迎えるかに見えた母

の、どこにこれほどの情熱がひそんでいたのか、体力、気力共に目をみはるほどの意欲をもって、むしろ若い私に対抗するかの如く、織物に燃えはじめたのである。

(志村ふくみ『一色一生』より)

*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問3 傍線部B「そそくさと奥にひっこむ」心理を表すものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 私の心を包み込む温かさ
- 2 私の傍によることのおそろしさ
- 3 私の一人暮らしに対する心配
- 4 私が使った水を流すことを惜しむ気持ち

問4 傍線部C「死んだものと思う」ようにした理由は何か。それを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 会えないけれど、この世にいないと考えればあきらめもつくと思ったから。
- 2 会えないけれど、死の重大さを考えればたいしたことはないと思えるから。
- 3 死んだと思えば、今何をしているか気にしなくていいから。
- 4 死んだと思えば、天国にいと考えて気持ちを慰められるから。

問5 傍線部D「堰を切った水」とはどういう意味か。それを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 縁の薄かった実の兄を亡くし、こみあげてくる悲しい気持ち。
- 2 機に出会い、どうしても機をやってみたいという気持ち。
- 3 実母の存在を知ってしまい、実母に会いたいという気持ち。
- 4 芸術の世界を知り、芸術で生きていきたいという気持ち。

問6 傍線部Eの「手にふれた」というばかり」とはどういう意味か。それを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 ほんの少し前手にふれただけ
- 2 ほんの少し手にふれただけ
- 3 手にふれること以外は何もない
- 4 手にふれることだけでも貴重な

問7 傍線部Fの「許すわけにはいかなかった」理由は何か。それを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 養父母に娘の世話を任せる母らしからぬ行動を許せないから。
- 2 あまりにも気軽に機をやりたいという気持ちを許せないから。
- 3 自分がやりたくて出来なかった機をやらせたくないから。
- 4 養父母に子どもを託したのに手元に置きたいと言えないから。